

本学学生のネット依存傾向と関連諸要素、及びエゴグラムに関する追跡研究

藤井 壽夫

A Follow-up Study on the Relation between Net Addiction Tendency and some related Factors, Egogram in HAKODATE Junior College Students

Hisao FUJII

概 要

現在、スマホを中心としたインターネット（以下：ネットと略す※論文名等は原文のまま）に関する問題は大学生における学修、学生生活全般に大きな影響を与えている。筆者は昨年度、本学入学生を対象に、ネット依存に関する質問紙調査を実施した結果、ネット依存得点とネット使用時間、ネット被害経験、ネット依存自覚度との関連が認められ、ネット依存傾向の自覚はあるが、依存から抜け出せない実態等が示唆された。また性格特性との関連を探った結果、適応本能との関連が明確に示された（藤井2017）。この結果を踏まえて、昨年度前期に全学生を対象にネット依存等に関する研修会を実施し、学生への注意喚起を図ったところである。そこで、2年生になった時点での実態、1年後の変化をみるため、昨年度と同一の質問紙による追跡調査を全学生対象に行った。その結果、ネット依存傾向、ネット使用時間、ネット依存自覚度、ネット知識自己評価等において、依然として昨年度と同様の傾向が示された。また深刻なネット依存が懸念される学生数の微増、自己否定的エゴグラム特性とネット依存傾向との明確な関連が示された一方、ネット依存を自覚しつつ、ネットを積極的に活用し精力的に生活している現代青年像の出現が窺われた。

問 題

現在、ネットに関する問題は大きな社会問題として、マスコミにも度々取り上げられている。警察庁は2006年、「バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会」を設置し、2006年4月より12月まで、合計9回にわたり審議会を開催している。9月には「携帯電話がもたらす弊害から子どもを守るために」（警察庁2006a）を中間報告として、12月には「バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守るために」（警察庁2006b）を最終報告書として公表した。その中で、子ども（※子どもとは18歳未満の青少年をさす）にもたらす弊害として、子どもが携帯電話を通してネットに接続することにより、子どもが違法・有害情報にさらされること、及び子どもが犯罪の加害者、被害者になる危険性を指摘している。また家庭用ゲーム機による害にもふれ、暴力シーン等により子どもの反社会的な行動や人格の形成が助長されること、バーチャル空間にのめり込み、子どもの健全育

成に必要な実体験等の機会が損なわれること等を懸念している。さらに子どもが性行為等の対象となることも指摘されている。11年が経過した今、これらはすべて悪化の一途をたどり、青少年の健全育成にとり、緊要な問題となっている。加えて現在、新たに「ネット依存」の問題が重要視されている。第2回本研究会において、魚住（2006）は「メール利用と子どもたちの現状」について報告しているが、一日50通以上メールする子どもの心理状態、依存傾向にすでに触れており、メールに多くの時間を費やす子どもの依存的で不安定な人間関係を指摘している。ところで2006年は、60年ぶりに教育基本法、学校教育法、学校教育法施行規則等が改定された年でもある。戦後60年の間に科学技術等の進歩により、情報化、国際化社会が出現し、倫理規範意識、価値観等を大きく変化させたことにこれまでの教育の枠組全体が対応しきれなくなったためである。特に情報通信技術の進歩は目覚ましいものがあつたと言える。ネット社会出現

は教育の枠組にとどまらず、社会全体のを大きく変化させたがその負の影響も重大な問題として浮上してきている。現在、スマートフォンに代表される個人端末によりネットに接続し、その利用時間の増加により、多くの児童・生徒・学生が、ネット依存傾向を有するまでになっている（総務省情報通信政策研究所2013）。内閣府（2013）が実施した「平成24年度青少年のインターネット利用環境実態調査」によれば、高校生の携帯端末所持率は98.1%にのぼり、中学生においては51.6%、小学生においても27.5%という状況になっている。総務省（2014）が東京都内の高校生15,191人を対象に実施した「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」では55.8%（傾向大4.6%、傾向中55.2%）が依存傾向が疑われる結果となった。津田等（2015）は小学生4～6年生849名、中学1～3年生896名で質問紙調査を行い、小学生7.5%、中学生22.0%に依存傾向が見られ、就寝時刻、学習時間等、生活習慣への影響を示唆している。金子等（2012）は2県の中学生2122名に対し、ネットに関する調査を行い、現代の思春期の子どもたちにとって、ネットは必要不可欠なコミュニケーションツールとなっている一方、ネットいじめ、ネット依存が重要な問題となっており、メンタルヘルスとの関連を指摘している。海沼・原田（2015）は中学生・高校生向けネット依存傾向尺度を作成し、中学・高校生890名を対象に、その信頼性・妥当性を検討し、中学生、高校生とも性差が認められること、SNS利用が日常生活へ影響を及ぼしていることを認めている。西村（2015）は中学生568名を対象に、ネット利用状況、ネットいじめの実態を調査した。その結果、90%の子どもがスマホ等でネット利用し、うち50%は毎日利用していること、16.2%がネットいじめを経験しており、そのうち90%の子どもは、いじめがさらにひどくなることを恐れていること等を指摘している。ネット依存尺度と心理的アセスメントを用いて、心理学的なリサーチを行っている研究も多く見られる。日野（2013）は中学生549名を対象に鄭（2007）を参考に作成した「インターネット依存尺度」と甲斐等（1991）の

自己成長エゴグラム（SGE）を用いて調査し、①依存傾向は女子が男子より高いこと②ネット依存傾向の高い人のエゴグラムパターンにN型Iが多いこと等を指摘している。大学生においては鄭（2008）は大学生のインターネット依存傾向プロセスとインターネット依存自覚傾向の関連を調べ、依存傾向のある学生ではその自覚にばらつきがあることを示唆している。また友納（鄭）（2013）は大学生におけるインターネット依存傾向を形成する要因として、心理情緒要因、物理的要因、心理ストレス要因、対人関係要因、家族会話機能要因、個人性格要因の6要因について、個人性格、心理ストレス、対人関係、家族会話機能の要因において「不適切な認知」が生じ、ネット依存傾向形成に影響を及ぼすことを考察している。橋本他（2011）はインターネット利用と依存に関する共同研究を行い、①ネットの長時間利用、②ネット上の種々のサービス・コンテンツ利用、③友人関係の不満足、孤独感、抑うつ傾向が高い、の3要因が影響しており、長時間使用により睡眠時間が短縮され、家族間会話が不足することにより、さらなる孤独感、依存傾向が深まると考察している。他にも仁尾（2009）は大学生のインターネット依存と友人関係における不安との関係について、土本（2006）は大学生における携帯電話依存傾向と内的対象想起との関連について、伊藤（2009）は大学生のインターネット中毒傾向に関して検討している。本学においては、未発表ながら筆者が2014年、保育学科2年生を対象に「ネット依存等に関する調査」を実施し、生活リズムが乱れ、欠席がちな学生等、ネット依存傾向と講義への欠席、遅刻との関連が示唆された。また、サイバーストーカー被害も確認された。そこで、筆者（藤井2017）は昨年度、28年度入学生を対象にネット依存、及び関連諸要因に関するアンケートを実施し、全体のネット依存平均得点が高いこと、依存傾向が中程度以上学生が半数近くに及ぶこと、ネット依存とネット使用時間、ネット被害経験に有意な相関が見られること等が示唆された。また、同時に実施したエゴグラム等との関連について、ネット依存傾向とAC（Adapted Child）との関

連が明確に示唆された。この結果を基に、昨年度前期、全学生対象にネットに関する注意喚起を目的とした研修会を実施した。そこで本研究は1年後の経年変化を探り、ネット依存傾向の実態を把握し指導に役立てることを目的として、昨年度と同一の質問紙を用いた追跡調査を行うこととした。

方 法

対象

函館短期大学平成28年度入学の2年生生141人を対象に調査を実施した。内訳は食物栄養学科71人（男子19人、女子52人）、保育学科70人（男子7人、女子63人）でそのすべてが分析の対象となった。（欠損値=0）

調査時期

2017年3月下旬

調査の方法

食物栄養学科、保育学科ともオリエンテーション時に教師による説明の後、マークシートに回答する形式で調査を行った。なお、個人に対するアンケートではあることから、本学実験等倫理委員会へ審査を依頼し、承認を得た。

調査・研究の内容

ネット依存傾向を測定する尺度としてはYoung(1998)が開発し、久里浜医療センターにて訳出した20項目からなる尺度を用い、回答はすべて「全くない」(1点)、「まれにある」、「ときどきある」、「よくある」、「いつもある」(5点)の5件法での回答を求めた。

性格特性を測定する尺度としては、「はい」(2点)、「どちらでもない」(1点)、「いいえ」(0点)の3件法、53項目からなる東大式エゴグラム(TEGⅡ)を用いた。ネット被害経験については、「ネットでいやな思いをしたことがある」の設問を設け、「一度もない」、「1～2回ある」、「何回もある」の3件法で回答を求めた。

ネットやオンラインゲームの使用時間については、「ネット(ゲーム)使用時間」の設問を設け、「1時間未満」、「1～2時間」、「3～5時間」、「6～7時間」、「8時間以上」の5件法での回答を求めた。SNS開始時期については、「SNSはいつから始めましたか」の設問を設

け、「小学校」、「中学校1年」、「中学校2年」、「中学校3年」、「高校から」の5件法で回答を求めた。ネット依存を自ら自覚しているか否かについては、「自分はネット(ゲーム)依存だと思う」の設問を設け、「全く思わない」(1点)、「思わない」、「少し思う」、「いつも思う」(4点)の4件法で回答を求めた。ネットに関する知識の熟知度については、「全く知らない」(1点)、「あまり知らない」、「だいたい知っている」、「熟知している」(4点)の4件法で回答を求めた。

これらの結果を、平均の比較、相関関係、重回帰分析、 χ^2 検定、依存得点高低による群間比較、エゴグラムパターン分析等によりその関連を探索的に検討し、ネット依存に関する諸要因を探っていくこととした。

結 果

1 ネット依存傾向

Young(1998)による20項目からなる、ネット依存度を測定する5件法スクリーニングテストの合計点(20～100)を個々に算出し、男女別、学科ごとに集計した結果、全体平均は昨年より1.29低下し36.22(入学時37.51)であった。この値は平均的ユーザーの範囲内ながら、中程度の依存傾向あり(40.0以上)に近い値であり、学科別、ならびに男女別においても同様の結果を示した。参考のため昨年度と今年度の平均の比較を行ったが有意な差は認められなかった(Table1)。

Table1 性別×学科別のネット依存得点

ネット依存得点	男 子			女 子		
	平均	SD	N	平均	SD	N
食物栄養学科	36.42	9.67	19	38.73	12.15	52
(2016)	(38.21)	(10.56)	19	(38.46)	(13.38)	56)
						n. s.
保育学科	46.14	14.44	7	32.98	10.22	63
(2016)	(44.83)	(9.07)	6	(35.87)	(11.38)	67)
						n. s.
全 体	39.04	11.69	26	35.58	11.45	115
(2016)	(39.80)	(10.44)	25	(37.06)	(12.35)	123)
						n. s.

次に依存得点を従属変数、性別（男子・女子）×学科別（食物栄養学科・保育学科）を要因とする二元配置分散分析を行った。男子（ $M=39.24$, $SD=11.69$, $n=26$ ）は女子（ $M=35.58$, $SD=11.45$, $n=115$ ）に比べ有意に高く（ $F=4.13$, $p<.05$ ）性差が認められた。その後の検定で性差は保育学科でのみ認められ、男子は有意に女子より高かった（ $F=4.13$ $p<.05$ ）。食物栄養学科（ $M=38.11$, $SD=11.52$, $n=71$ ）は保育学科（ $M=34.30$, $SD=11.31$, $n=70$ ）に比べ高い傾向を示したが、学科間の差は認められなかった。性差は認められたものの、保育学科のみであること、依存得点平均は男子が女子より高いこと、男子の人数が少ないこと等を勘案し、この後の処理は性別、学科とも一括して行うこととした。

2 ネット依存度

Young(1998)による、ネット依存測定スケールにおいては、合計点で40点未満を平均的ユーザー（依存傾向なし）、40～79点を「中程度に問題あり」、80点以上を「重大な問題あり」としている。これに従い依存度、及び各段階ごとの依存得点の平均値を算出した。

(Table2)

Table2 ネット依存度と平均値

	人数	%	(グループ平均)	SD
平均的ユーザー	101	71.6	30.31	5.42
(2016)	(98)	66.2	30.87	4.72)
中程度に問題あり	39	27.7	50.64	8.63
(2016)	(48)	32.4	49.02	8.66)
重要な問題あり	1	0.7	71.00	-
(2016)	(2)	1.4	87.00	5.66)

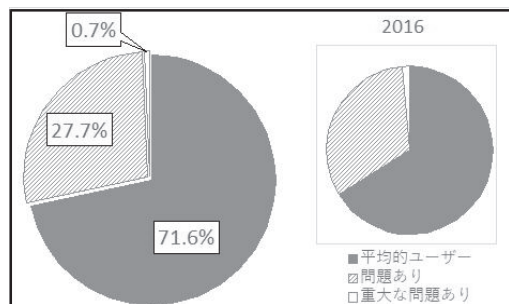


Figure1 ネット依存度別の割合

次に、依存度別の割合を、昨年度の結果とともに示した (Figure1)。人数の分布について昨年度と比較するため χ^2 検定を実施したが有意な差は認められなかった。

3 ネット使用時間

ネットやオンラインゲームの使用時間について、「ネット（ゲーム）使用時間」の設定を設け、「1時間未満」、「1～2時間」、「3～5時間」、「6～7時間」、「8時間以上」の5件法で行った (Table3)。

Table3 ネット使用時間

	2017		2016	
	人数	%	人数	%
1時間未満	28	19.9	27	18.2
1～2時間	45	31.9	46	31.1
3～5時間	48	34.0	60	40.5
6～7時間	11	7.8	11	7.4
8時間以上	9	6.4	4	2.7
全 体	141		148	

Figure2にその結果を示す。人数の分布について昨年度比較するため χ^2 検定を実施したが有意な差は認められなかった。グラフを比較してもほぼ同様の分布が見て取れた。

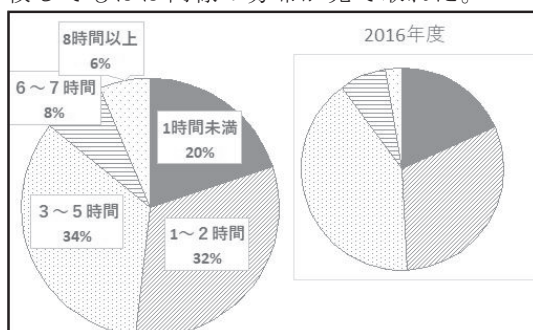


Figure2 毎日のネット（ゲーム）使用時間

昨年度同様、約半数の学生が毎日3時間以上ネットを使用しており、2.5時間以上を長時間使用すると看過できない状況である。3～5時間で12名減少しているが、8時間以上で5名増加しており、数名ながら1年の間に重篤化したことが予想される学生の存在が示された。学修時間、生活リズムの問題が心配される状況が継続されていると言える。

次にネット使用時間とネット依存傾向の関連を探るためSpearmanの相関係数を両変数間で求めたところ、.403と中程度の正の相関を示した（ $P<.001$ ）。昨年と同様の結果と言える（2016年 .508 $p<.001$ ）

4 ネット依存自覚度

ネット依存を自ら自覚しているか否かを調べるため、「自分はネット（ゲーム）依存だと思う」の設問に対し、「全く思わない」、「思わない」、「少し思う」、「いつも思う」の4件法で回答を求め、その傾向と他の下位尺度との関連を検討した（Table4、Figure3）。

Table4 ネット依存自覚度の経年変化

	2017		2016	
	人数	%	人数	%
全く思わない	29	20.6	34	23.0
思わない	43	30.5	51	34.5
少し思う	55	39.0	56	37.8
いつも思う	14	9.9	7	4.7
全 体	141		148	

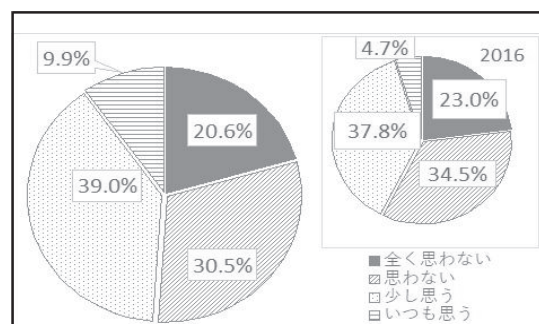


Figure3 ネット依存自覚度の割合

この傾向は昨年と全く同様で、「いつも思

う」にわずかな増加が見られるが経年変化は見られなかったと言える。 χ^2 検定を実施したがやはり有意差は認められなかった。

次に、「全く思わない」「思わない」を「ネット依存自覚なし群」、「少し思う」、「いつも思う」を「ネット依存自覚あり群」とし、ネット依存得点との群間比較を行った。その結果、「ネット依存自覚あり群」が、「ネット依存自覚なし群」より有意に依存得点が高かった（ $F=15.41$, $P<.001$ ）（Table5）。この傾向は昨年度と同様であった。

ネット依存傾向とネット依存自覚度との関連性をより明確にするため、ネット依存得点をTable6に示すように被験者数を4分割（25%×4）し、ネット依存自覚有無群との2×4の χ^2 検定を実施した（Table7）。

Table6 ネット依存得点4群分割

群 名	得点範囲	2017		2016	
		N	%	N	%
依存度1	(20～28)	35	24.8	38	25.7
依存度2	(29～33)	34	24.1	40	27.0
依存度3	(34～41)	38	27.0	34	23.0
依存度4	(44～100)	34	24.1	36	24.3

χ^2 検定の結果、人数の偏りが有意であった（ $\chi^2(3)=22.819$, $p<.001$ ）。残差分析を行った結果、ネット依存得点の低い群にネット依存自覚なし群が多く、ネット依存得点の高い群にネット依存自覚あり群が多いことが確認された。鄭（2008）はネット依存無自覚度とネット依存度との間の関連性は認められないとしたが、前回に続き、本調査においては、明確に関連が示された。

Table5 「ネット依存自覚なし群」「ネット依存自覚あり群」×ネット依存得点

	ネット依存自覚なし群				ネット依存自覚あり群			
	平均値	N	SD		平均値	N	SD	
ネット依存得点	2017	32.67	72	11.11	39.93	69	10.84	***
	2016	(34.32)	85	11.36	41.83	63	11.70)	***

*** $p<.001$

Table7 「ネット依存自覚なし群」「ネット依存自覚あり群」×ネット依存得点の χ^2 検定結果

ネット依存得点四分	依存度 1	依存度 2	依存度 3	依存度 4
ネット依存自覚なし群 (N=85)	28(3.9**) 38.9%	20(1.0) 27.8%	15(-1.7) 20.8%	9(-3.3**) 12.5%
ネット依存自覚あり群 (N=63)	7(-3.9**) 10.1%	14(-1.0) 20.3%	23(1.7) 33.3%	25(3.3**) 36.2%
合 計 (N=141)	35 24.8%	34 24.1%	38 27.0%	34 24.1%

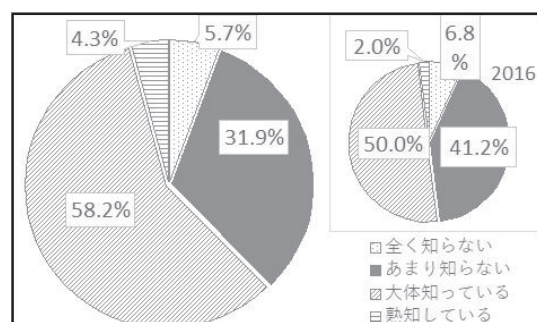
**p<.01

5 ネット知識に関する自己認識

ネット知識に関する自己認識を把握するため、「全く知らない」、「あまり知らない」、「だいたい知っている」、「熟知している」の4件法で回答を求め、Table8の結果を得た。昨年度との比較のために円グラフをFigure4に示す。

Table8 ネット知識自己認識結果

	2017		2016	
	人数	%	人数	%
全く知らない	8	5.7	10	6.8
あまり知らない	45	31.9	61	41.5
大体知っている	82	58.2	74	50.3
熟知している	6	4.3	3	2.0
全 体	141		148	


Figure4 ネット知識自己認識度分布

「全く知らない」、「あまり知らない」が37.6%と昨年度の48.0%を10.4ポイント下回った。一方「大体知っている」は58.2%で昨年度の50.0%を8.2ポイント上回った。そこ

で今年度と昨年度における差を確認するために χ^2 検定を実施したが有意な差は認められなかった。(Table9 ※次ページに掲載)

次に、ネット知識自己認識とネット使用時間、ネット依存得点と関係を探るため、Spearman相関関係を求めた (Table10)。

Table10 ネット知識自己認識と使用時間等の相関関係

	ネット知識	ネット使用時間	ネット依存得点
ネット知識	1.00	.206*	.187*
ネット使用時間		1.00	.481**
ネット依存得点			1.00

* p<.05 ** p<.01

ネット知識自己認識とネット使用時間 (.206 p<.05) に弱い正の相関がみられた。ネット使用時間、ネット依存得点間には中程度の相関 (.481 p<.01) がみられることから、ネットを長時間使用し、自分の依存傾向も自覚しているがネットのことはあまり知らないと認識していることが窺われる。

Table9 「ネット知識」に関する経年変化に関する χ^2 検定結果

ネット知識	全く知らない	あまり知らない	大体知っている	熟知している
2016年入学時 (N=148)	10(.1) 6.8%	61(1.6) 41.2%	74(-1.4) 50.0%	3(-1.1) 2.0%
2017年進級時 (N=141)	8(-.1) 5.7%	45(-1.6) 31.9%	82(1.4) 58.2%	6(1.1) 4.3%
合 計 (N=289)	18 6.2%	106 36.7%	156 54.0%	9 3.1%

n. s.

Table11 「ネット知識なし群」「ネット知識あり群」×ネット使用時間の χ^2 検定結果

ネット知識有無二分	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～7時間	8時間以上
ネット知識なし群 (N=53)	15(2.0) 28.3%	15(-.7) 28.3%	20(.7) 37.7%	2(-1.4) 3.8%	1(-1.7) 1.9%
ネット知識あり群 (N=88)	13(-2.0) 14.8%	30(.7) 34.1%	28(-.7) 31.8%	9(1.4) 10.2%	8(1.7) 9.1%
合 計 (N=141)	28 19.9%	45 31.9%	48 34.0%	11 7.8%	9 6.4%

n. s.

次に「全く知らない」、「あまり知らない」を「ネット知識なし群」に、「大体知っている」、「熟知している」を「ネット知識あり群」に二分し、「ネット使用時間」との両変数間で χ^2 検定を実施した (**Table11**)。その結果、人数の偏りは有意差は認められなかった ($\chi^2(4)=8.192$, n. s.)。このことからネットを長時間使用していることと、ネット知識に自信をもっているとは無関係であるという昨年度と同じ結果となった。

8 ネット依存傾向とエゴグラム特性

ネット依存を引き起こす心理的要因を探るため、性格特性を測定する尺度として、「2はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法、53項目からなる東大式エゴグラム (TEG II) を同時に実施した。エゴグラムはCP (Critical Parent 批判的な親、父性)、NP (Nurture Parent 養育的な親、母性)、A (Adult な大人、自我)、FC (Free Child 自由な子供、本

能、快感原則に従おうとする本能欲求)、AC (Adapted Child 順応した子供、適応本能) の5因子から一人一人の得点を算出した。性格特性がネット依存を引き起こす要因の一つと考えられることから、ネット依存得点を従属因子、エゴグラム5因子を説明変数として、重回帰分析を実施した (**Table12**)。ステップワイズ方式による重回帰分析の結果、AC、FCが説明変数として有意であった。結果のパス図を**Figure5**に示す。

Table12 ネット依存得点を従属変数とする重回帰分析 (N=141) ** $P<.01$

2017	B	β	t
AC	.645	.188**	3.43***
FC	.419	.161*	2.00*
$R^2 = .103***$ F(2, 138) 7.890***			

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

<参考：2016年入学時の結果>

2016	B	β	t
AC	.621	.267**	3.34**
$R^2 = .111**$ F(1, 146) 11.18**			

* $p < .05$ ** $p < .01$

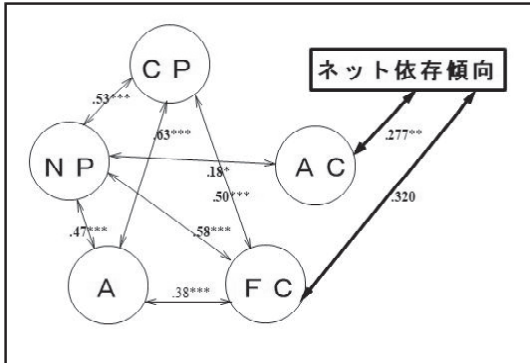


Figure5 導かれたパス図* $p < .05$ ** $p < .01$

エゴグラム5因子中ACはNPとのみ有意ではあるがほとんど相関関係は示さず (.18*)、ほぼ別個の特性として存在しており、ネット依存得点はこのACが第一の説明変数となっており、次いでFCが関与していた。参考のため昨年度の結果をFigure6に示す。

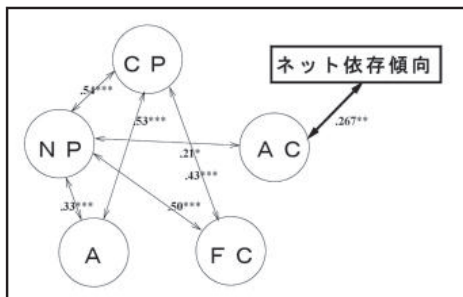


Figure6 2016(入学時)* $p < .05$ ** $p < .01$

Table13 エゴグラム各因子の平均値

因子	食物栄養学科		保育学科		全体	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
CP	11.56	5.54	11.70	4.02	11.63	4.83
NP	13.97	5.17	14.37	4.37	14.17	4.78
A	11.18	5.36	10.14	4.50	10.67	4.96
FC	11.59	4.97	12.80	3.76	12.19	4.44
AC	13.03	5.44	12.57	4.42	12.80	4.98

次にエゴグラム得点の各因子平均値によるエゴグラムパターンを検討した。学年全体、学科別の平均値をTable13に示す。

両学科のエゴグラムについて、食物栄養学科、保育学科ともNP優位傾向を示した。エゴグラムパターンに多少の差が見られるものの(Figure7)、5因子についてT検定を実施したところ、すべての因子で有意差は認められなかった。

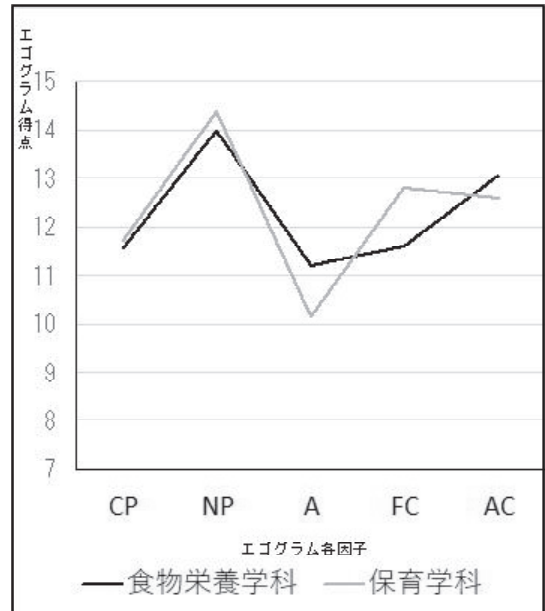


Figure7 学科別平均値によるエゴグラム

従って、以後の処理は学年一括して行った。

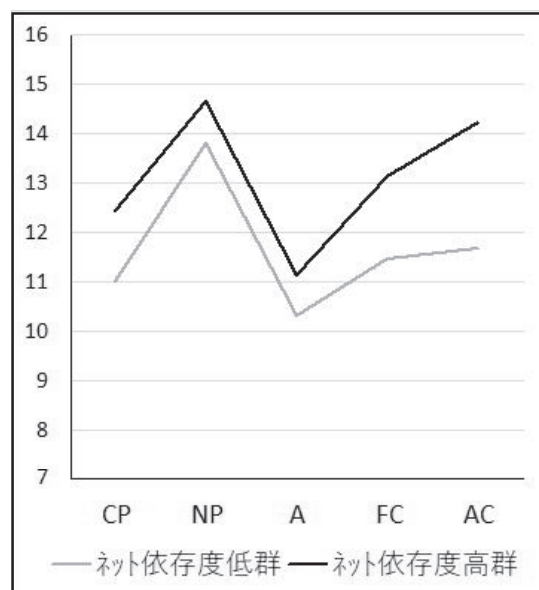
はじめにネット依存傾向とエゴグラムとの全体的関連を探るため、ネット依存得点低位50%を「ネット依存低群」、上位50%を「ネット依存高群」として、エゴグラム各因子得点との群間比較を行った(Table14)。その結果、FC ($T = -2.28(139)$ $p < .05$)、AC ($T = -3.16(139)$ $p < .01$)において「ネット依存高群」は「ネット依存低群」より有意に高い数値を示した。

Table14 ネット依存高低群におけるエゴグラム各因子得点平均値

因子	ネット依存低群		ネット依存高群		T検定
	平均	SD	平均	SD	
CP	11.00	4.82	12.41	4.76	n. s.
NP	13.79	4.85	14.63	4.67	n. s.
A	10.31	4.97	11.11	4.98	n. s.
FC	11.44	4.45	13.13	4.28	*
AC	11.65	5.05	14.22	4.45	**

* $p < .05$ ** $p < .01$

各群平均値におけるエゴグラムをFigure8に示す。


Figure8 ネット依存各群におけるエゴグラム

全体的傾向として、①「ネット依存高群」の心的エネルギー量が「ネット依存低群」より上回っていること、②「ネット依存高群」は典型的なN型Iのタイプなのに対し、「ネット依存低群」はFCとACが同程度のNP優位型を示したことが見て取れる。

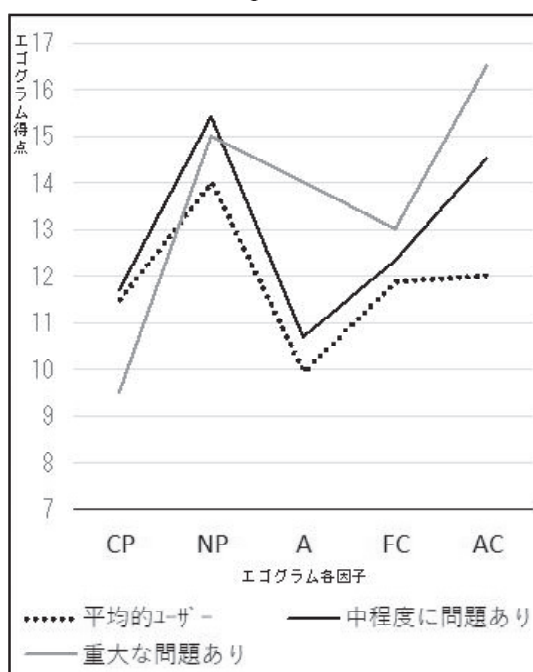
これらの結果を考慮しながら、ネット依存得点における、「平均的ユーザー」、「中程度に問題あり」「重大な問題あり」ごとのエゴグラム平均値（「重大な問題あり」は1名のみであるが、参考資料として記載）を求めた（Table15）。

Table15 ネット依存度ごとのエゴグラム各因子の平均値

因子	平均的ユーザー		中程度に問題あり		重大な問題あり	
	平均	SD	平均	SD	平均	
CP	11.12	4.85	13.00	4.63	10.00	n. s.
NP	13.76	4.92	15.36	4.22	9.00	n. s.
A	10.18	4.84	11.87	5.17	13.00	n. s.
FC	11.79	4.50	13.10	4.17	17.00	n. s.
AC	11.82	4.86	15.26	4.36	16.00	***

*** $p < .001$

各群平均値（重大な問題ありは実数）におけるエゴグラムをFigure9に示す。


Figure9 ネット依存度別エゴグラム

「中程度に問題あり」は明確なN型I、平均的ユーザーはNP優位型、「重大な問題あり」は顕著なN型IIを示した。

エゴグラムにはCP、NP間において、CP>NPの人は他者否定傾向が強く、NP>CPの人は他者を肯定する傾向が強いとされる。またFC>ACは自己肯定が強く、AC>FCの人は自己否定が強いとされる。これらの組み合わせにより「自己肯定」、「自己肯定他者否定※以後自肯他否と略す」、「自己否定他者肯定※以後自否

Table16 「ネット依存低低群」「ネット依存高高群」とエゴグラムタイプの χ^2 検定結果

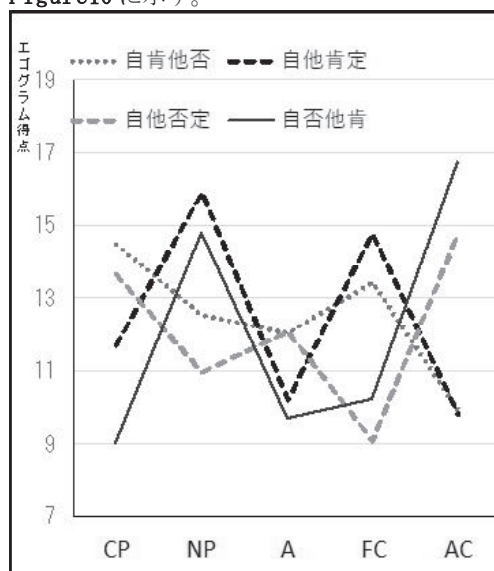
	自肯他否	自他肯定	自他否定	自否他肯
ネット依存低低群 (N=35)	5(-.4) 14.3%	17(2.4)** 48.6%	2(-2.2)** 5.7%	11(-.4) 31.4%
ネット依存高高群 (N=33)	6(.4) 18.2%	7(-2.4)** 21.2%	8(2.2)** 24.2%	12(-.4) 36.4%
合 計 (N=68)	11 16.2%	24 35.3%	10 14.7%	23 33.8%

 * $p < .05$ ** $p < .01$

他肯と略す」、「自他否定」の4つのパターンがある。そこで、被験者全員について、エゴグラム得点から4つのタイプに分類した。次に、ネット依存得点低位25%（「ネット依存低低群」）、上位25%（「ネット依存高高群」）を抽出し、各群内におけるエゴグラムタイプの分布について χ^2 検定を実施した。その結果をTable16に示す。

χ^2 検定の結果、人数の偏りが有意であった（ $\chi^2(3)=7.849$, $p < .05$ ）。残差分析を行った結果、「ネット依存低低群」に「自他肯定」タイプが多く、「ネット依存高高群」に「自他否定」タイプが多いことが確認された。4つのタイプ別に、エゴグラム各因子得点平均値を算出し描き出したエゴグラムを

Figure10に示す。


Figure10 タイプ別平均値によるエゴグラム

考 察

本調査は、本学2年生を対象に昨年度、入学直後の新入生オリエンテーション時に実施したものと全く同一の調査用紙を用いて、1年後となる2017年3月29日に、進級生対象のオリエンテーション時に学科ごとに実施したものである。ネット依存傾向をYoung(1998)「平均的ユーザー」は全体の71.3%と昨年度の66.2%より微増したが、全体平均36.22と昨年度37.51とほぼ同じであった。平均値の比較等を実施したが、有意な差は認められなかった。1年を経過しても同様の傾向が続いていたことになる。本調査では保育学科において性差が認められたが、これまでの多くの研究で女子が男子より依存傾向が高く出ている（総務省2016、日野2013）のに対し、本学保育学科では男子46.14と女子32.98を大きく上回った。Young(1998)の調査用紙では40点以上を「中程度に問題あり」としていることから保育学科男子の数値は深刻な結果と言える。被験者の数が7人と少なく、今後の検討が必要であるが、一部学生からの聞き取りにより、最近のオンラインゲームの圧倒的人気により男子の多くが、オンラインゲームに多くの時間費やしていることも背景にあるのではないかと推測される。ネット使用時間とネット依存傾向の関連については、中程度の相関（.403 $p < .001$ ）が認められた。これについても昨年度（.508 $p < .001$ ）と同様であったが、ネット依存傾向にはネットから離れたくても離れられない傾向も含まれることから（Young, 1998）、妥当な結果と言える。「自

分はネット依存だと思う」というネット依存自覚度について、ネット依存自覚なし群と自覚あり群とのネット依存得点の平均値比較はネット依存自覚あり群がなし群より有意に高かった（あり群39.93 なし群32.67 $F(1, 139) = 15.41$ $p < .001$ ）。昨年度と同様の結果であるが、ネット依存傾向を自覚している学生の方が実際に依存得点が高い状況であり、依存を自覚しネット依存存から脱却する努力により依存得点を下げたということではなく、ネット依存自覚があっても長時間使用をやめず、ネット依存傾向も改善しない学生像が窺える。ただ、「自覚してはいるが、自分を制御できず、やめられない。」という見方がある一方、一部学生との対話により、ネット依存傾向にある自分を認め、むしろSNS等を多用する自分を自分らしいと感じている現代青年像も窺える。この点については、今後別の方法により、情報化社会を生きていく若い世代の意識構造、青年像を検討していきたい。

「ネット知識熟知」に関してはネット使用時間と相関は認められるものの、弱い相関（.206*）にとどまったことは、ネットを長時間使用していても、ネットに関する知識については自信を持っていない学生像が窺えた結果である。ネット知識に関する経年変化が全く見られなかったことは1年経ってもネットに関して、あまり学んでいないとの見方もあるが、ネットの世界が日々複雑化し、新たな脅威、被害報告等がなされる中、追いつけない実態も窺える。エゴグラムとの関連では昨年はエゴグラム特性のACのみが、ネット依存傾向の説明因子として抽出されたが、今回はACとFCが抽出された。ACは生後間もなく、FC（※原初的な本能と考えられ、飲みたい、寝たい等の欲求と結びついている）と同じく出現するが、FCとは異なり、環境に適応することで生存を確保する、現実的適応本能と考えられている。学校臨床的には、幼少期にネグレクト等により、過剰適応の状態に生育した子どもは、周囲を常に気遣い、学級の中では大変「いい子」であるが、自分自身に自信を持てず、自己否定的傾向が一般的に認められる。本調査結果は、適応本能が強く、周囲に気を遣いすぎる人がネット依存傾向を持つことが

示唆された。同時にFCを説明変数として登場したことは、大学に入学し、大学生活を謳歌する中でFCの高揚とネット依存傾向がマッチングしていることは興味深い。ネット依存傾向は単に、使用時間等だけの問題ではなく、本人の性格特性も影響しているということを強く示唆している結果と言える。学科別のエゴグラム各因子平均値によるエゴグラムは食物栄養学科、保育学科ともNP優位傾向を示したが、本学は保育学科では保育士、幼稚園教諭を、食物栄養学科では介護施設、病院等での栄養士を目指して入学してくる学生が大半を占める。そのような関係でNP優位は十分に妥当な結果と言える。次に行ったネット依存高低群による群間比較において、ネット依存低群がNP優位型となったのに対し、ネット依存高群ではNP、AC優位でAが低いN型Iを示した。（Figure8）この結果は中学生において検討した日野（2013）と同じ結果であり、短期大学生にも共通の傾向が示されたと言える。N型Iは、人に優しく世話好きで「No」を言えないので仕事を頼まれると引き受け、他人に尽くすという傾向がある。俗に「ナイチンゲールタイプ」と言われたりするこのタイプは、ACが高いことから、愛着障害等も懸念される。これらのタイプの人がSNS等を始めたとき、他人を気にしすぎるあまり、返信等に気遣い、使用時間が長くなり、依存傾向を呈することは容易に想像がつく。ネット依存高群はネット依存低群よりすべての因子において得点が高かった。エゴグラムでは5因子得点の分布と同時に、そのエネルギーの強さも検討できる。ネット依存高群の学生はネット依存低群の学生より心的エネルギーが高く、生活は意欲的かつ活動的で何事にも積極的に取り組む姿が認められた。このことはネット依存を自覚しつつも、ネットを積極的に活用し、精力的に生活している現代青年像の窺われた。現代青年にとって、ネットがいかに不可欠であり、精力的に生きている学生ほどネット依存と隣り合わせであることを示唆していると言える。この点については今後、本学学生のみではなく、広い範囲から多くの被験者により調査を行い、検討していきたい。自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定の

組み合わせによるエゴグラム4タイプによるエゴグラムパターンとネット依存高低群群間比較では、ネット依存高群はネット依存低群より自他否定型が優位に多く、自他否定型が優位に少なかった。ただ、2群に分けた群間比較では傾向は示したものの χ^2 検定では有意差が認められなかったため、上位、下位25%を抽出しての群間比較を行ったこともあり、被験者数が少なくこれについても、今後の広範囲な調査研究が必要である。最後に、今回調査用紙に協力できる学生のみ学籍番号の付記協力依頼を行ったところ、多くの学生の記載を得た。今後、学業成績、欠席等との関連を探っていきたいと考えている。

ま と め

本研究より導かれたことは主として

- ①短期大学生生活1年を経過した後の今回の調査では、多くのデータで1年前の入学時とほとんど変わっておらず、ネット依存得点平均値も高い状態が継続していた。
 - ②ネット使用時間が長い学生はネット依存得点が高く、かつ自分にネット依存傾向があることを自覚している。
 - ③ネット依存得点の高い学生は、ACが高かった。
 - ④ネット依存得点の高い学生のエゴグラムはN型Iを示し、他人に気を遣いすぎる傾向が示された。
 - ⑤ネット依存を自覚しつつ、ネットを積極的に活用しつつ、精力的に生活している現代青年像の出現が窺われた
- の5点である。特にエゴグラム等から導かれた、ネット依存を引き起こす心的要因については、今後継続して調査研究を行っていく必要があると考えている。

謝 辞

本研究を行うにあたり、両学科のご協力により、オリエンテーション時に調査をさせていただくことができました。両学科の先生方、事務局担当の方々、学生に対しまして厚く感謝申し上げます。

引 用 文 献

- 藤井壽夫（2017）本学新入生におけるネット依存傾向と関連諸要素に関する心理学的研究．函館短期大学紀要, 43; 47-56
- 橋元良明他（2011）インターネット利用と依存に関する研究報告．総務省情報通信政策研究所
- 日野秀俊（2013）中学生におけるパソコンによるインターネットへの依存傾向とエゴグラムの関連性．学校教育学研究, 25: 63-73
- 伊藤将晃（2009）大学生のインターネット中毒傾向に関する研究．臨床教育心理学研究, 3, 1-6
- 甲斐淑子・芦原睦（1991）自己成長エゴグラム（SGE），心身医療
- 金子一史・小倉正義・濱田祥子・山脇彩（1212）中学生および高校生のインターネット使用とメンタルヘルスとの関連．電気通信普及財団研究調査報告書, 27: 213-218
- 警察庁（2006a）携帯電話がもたらす弊害から子どもを守るために．バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会
- 警察庁（2006b）バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守るために．バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会
- 警察庁（2017）平成28年度コミュニティサイト等に起因する事犯の現状と対策について
- 牟田武生（2004）『ネット依存の恐怖』教育出版
- 内閣府（2013）平成24年度青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果（速報）
- 仁尾友紀他（2009）大学生の携帯メール依存について－友人関係における不安との関係．徳島大学総合科学部人間科学研究, 17, 73-90
- 西村麻希（2015）中学生におけるネットいじめの実態－心理的支援および情報モラル教育のあり方についての検討－．西九州大学こども学部紀要, 6: 33-46
- 総務省情報通信政策研究所（2013）青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査．総務省情報通信研究所
- 総務省（2014）高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報

告書

- 総務省（2016）中学生のインターネット利用状況と依存傾向に関する調査. 総務省情報通信政策研究所
- 鄭艶花（2008）大学生の＜インターネット依存傾向プロセス＞と＜インターネット依存傾向自覚＞に関する実証的研究. 九州大学心理学研究, **9** :111-117
- 友納（鄭）艶花（2013）若者のインターネット依存傾向形成要因と特徴に関する心理学的研究. 九州共立大学総合研究所紀要, **6**:19-26
- 土本亜矢子・緒賀郷志（2006）大学生における携帯電話依存傾向と内的対象想起との関連. 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）, **55**, 217-225
- 津田朗子・木村留美子・水野真希（2015）小中学生のインターネット使用に関する実態調査－依存傾向と生活習慣について－. 金大医保つるま保健学会誌, 39(1):81-86
- 海沼亮・原田克己（2015）中学生・高校生向けネット依存傾向尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 353
- 魚住絹代（2006）『メール利用と子どもたちの現状』文部科学省審議会情報提供資料
- Young, K. S.（1998）Caught in the net:How to recognize the signs of internet addiction and a winning strategy for recovery. New York:Jhon Wiley & Sons, Inc.